

氏名（本籍）	ながた まりこ 永田 麻里子（東京都）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 26 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 15 日
学位授与の要件	共立女子大学大学院学則第 41 条第 1 項該当
論文題目	<b>幕末・明治期の外国人居留地における 洋服仕立て業および販売業</b>
論文審査委員	（主査）教授 長崎 巖 教授 熊谷 仁 教授 丸田 直美 教授 権藤 桂子 教授 宮武 恵子

## 論文内容の要旨

本研究は、幕末から明治期にかけ、洋服仕立て業および販売業が外国人居留地（長崎・横浜・神戸）において形成され発展していく過程を明らかにすることを目的とし、諸外国から外国人居留地への人（洋服仕立て業者および販売業者）と物（洋服そのもの）の流入、および外国人から日本人への洋服仕立て技術伝播の実態解明を試みた。また、洋服業形成の予兆を明らかにすべく、外国人居留地が設置される以前の日本国内における洋服に関する事象についても安土・桃山時代から精査した。資料は、開港場で発行された英字新聞や Directory を中心に用いた。

第 1 章では、本研究における問題の所在と先行研究を明らかにした上で、研究目的と方法、意義について言及した。

第 2 章では、安政の開国以前に起こった洋服の流入と洋服業者が進出する予兆について明らかにした。

安土・桃山時代の長崎には、和服仕立てと洋服仕立ての両方を心得た日本人職人が存在した可能性が高いことがわかった。また、中国には洋服を仕立てる中国人職人がおり、来日した欧米人らが着用する洋服は、彼らによって仕立てられた可能性があることを明らかにした。

江戸時代に入り、平戸に設置されたイギリス商館には、中国やスペインの洋服「仕立屋」が出入りしていた。また、鎖国体制下においても、出島に居留するオランダ人は自国の生活様式を持ちこみ、同地に洋服仕立て職人も雇っていた。

第 3 章では、安政の開国以降に起こった日本国内における洋服販売業者の進出（洋服業の形成）について明らかにした。

長崎・横浜外国人居留地ともに、洋服仕立て業者より先行して、文久の頃にはイギリスやオランダより来日した競売商や雑貨商が既製の洋服を販売していた。

第 4 章では、第 3 章で明らかにした洋服販売業者に続いて長崎・横浜外国人居留地に進出した洋服

仕立て業者（洋服業の形成）について明らかにした。

長崎では、早くから中国業者の台頭が認められた。当時、未条約国の国民であった中国人は、条約国民であった欧米人に「附属」する形で営業していた。

横浜では、先に香港や上海で開業した欧米業者や中国業者の開業が早かった。とりわけ、欧米業者の間では、経営者・職人に連関が認められた。慶応の頃には、彼らから同業者が派生していった。

経営方針と商品内容は、業態ごとに異なっていた。婦人物を扱う業者は、部門別経営によって服飾品から日用品まで多様な商品を取り扱っていた。紳士物を扱う業者は、注文服および既製服を主軸とし、材料の販売から仕立てに至るまで一貫した経営を行っていた。

販売方法は、四季を考慮した販売法のほか、割引販売や現金取引なども導入していた。

顧客は、居留する外国人をはじめ、寄港する船員や商人であった。

第5章では、明治元（1868）年から外国人居留地が撤廃される明治32（1899）年の間に営業していた洋服仕立て業者について、2つの視点から調査を行い新しい知見を得た。

第一に、第4章で明らかにした洋服仕立て業者の進退に着目し、洋服業が発展していく過程を明らかにした。その際、慶応3（1868）年に設置された神戸外国人居留地における当該業者の検討を加えた。業者数の推移については、Directoryをもとに5年毎に集計した。

長崎では、明治10（1877）年まで欧米業者が2、3社あった。

横浜では、欧米業者が4から8社の間を年々行き来していた。中国業者は、明治期に入ると欧米業者数を上回る傾向が認められた。このことは、いわゆる鹿鳴館時代に中国業者は衰退するという先行研究の見解を覆す結果となった。

神戸では、欧米業者が2から4社の間を年々行き来していた。なかには、横浜で開業した後に、神戸で開業した業者もあったが、横浜ほどの発展は認められなかった。

また、長崎・横浜・神戸ともに、Directoryに掲載されていない中国業者が複数いた可能性が高いことがわかった。

第二に、外国業者から日本人への洋服仕立て技術伝播について、横浜外国人居留地をめぐる事例を明らかにした。

日本人の中には、欧米人や中国人に雇われる形で技術を習得した者と、欧米人を自らの店に雇う形で技術を習得した者があった。

第6章では、各章を要約し結論を述べるとともに、これについて考察した。

洋服業の出現は開港以前の長崎にあり、形成と発展は開港後の横浜にあると言えるが、長崎と横浜の事象を一続きに述べることは出来ない。

特筆すべきことは、長崎および横浜における洋服業の出現・形成において、中国との連関が垣間見られる点である。洋服業者の中には、欧米から直接来日した欧米業者のほか、香港・上海より来日した欧米中の業者があった。このことは、洋服業という西洋文化が中国を介して日本に持ち込まれたことを意味している。

加えて、日本人が有する洋服仕立て技術の根源を探ると、欧米人より習った欧米直伝系と、中国人を介して習った中国経由系に別れることが明らかとなる。

以上の成果は、日本における洋服業の源流を、欧米のみならず中国に見出すものであり、日本の服飾文化史だけでなく中国の服飾文化史の進展にも貢献することが出来ると考える。

以上

## 論文の審査結果の要旨

本研究は、幕末から明治期にかけ、洋服仕立て業および販売業が外国人居留地（長崎・横浜・神戸）において形成され発展していく過程を明らかにすることを目的とし、諸外国から外国人居留地への人（洋服仕立て業者および販売業者）と物（洋服そのもの）の流入、および外国人から日本人への洋服仕立て技術伝播の実態解明をするものである。また、これらの地域での洋服業形成の予兆を明らかにすべく、外国人居留地が設置される以前の日本国内における洋服仕立に関する事象についても安土・桃山時代から江戸時代後期にかけて精査した。研究に使用した資料は、開港場で発行された英字新聞や Directory を中心に、先行研究では調査が及んでいなかった政府関係資料ほかの一次資料である。

第1章では、本研究における問題の所在と先行研究を明らかにした上で、研究目的と方法について述べている。

第2章では、安政の開国以前に起こった洋服の流入と洋服業者が進出する予兆について明らかにした。安土・桃山時代の長崎には、和服仕立てと洋服仕立ての両方を心得た日本人職人が存在した可能性が高いこと、当時中国には洋服を仕立てる中国人職人がおり、来日した欧米人らが着用する洋服は、彼らによって仕立てられた可能性があることを明らかにした。また、江戸時代、平戸に設置されたイギリス商館には、中国やスペインの洋服「仕立屋」が出入りしていたこと、鎖国体制下の出島に居留するオランダ人は、自国の生活様式を持ちこみ、洋服仕立て職人も雇っていたことを明らかにした。

第3章では、安政の開国以降に起こった日本国内における洋服販売業者の進出（洋服業の形成）について明らかにした。具体的には、長崎・横浜両外国人居留地ともに、洋服仕立て業者より先行して、文久の頃（1860年代）にはイギリスやオランダより来日した競売商や雑貨商が既製の洋服を販売していたことを発見した。

第4章では、第3章で明らかにした洋服販売業者に続いて長崎・横浜外国人居留地に進出した洋服仕立て業者（洋服業の形成）について明らかにした。長崎では、早くから中国業者の台頭があったこと、当時、未条約国の国民であった中国人は、条約国民であった欧米人に「附属」する形で洋服販売業を営業していたことを見出した。

一方横浜では、先に香港や上海で開業した欧米業者や中国業者の開業が早かったこと、欧米業者の間では、経営者・職人に連関が認められること、慶応の頃には、彼らから同業者が派生していったことなどを明らかにした。

洋服販売業者の経営方針と商品内容は、婦人物を扱う業者と紳士物を扱う業者で異なっていることを見出した。また、洋服の販売方法は、四季を考慮した販売法のほか、割引販売や現金取引なども導

入しており、顧客は、居留する外国人をはじめ、寄港する船員や商人であったことを明らかにした。

第5章では、明治元（1868）年から外国人居留地が撤廃される明治32（1899）年の間に営業していた洋服仕立て業者について、2つの新しい知見を得た。

第一に、外国人居留地における当該業者について検討を加えた結果、長崎では、明治10（1877）年まで欧米業者が2、3社あったこと、横浜では、欧米業者が4から8社の間を年々行き来していたが、中国業者は、明治期に入ると欧米業者数を上回る傾向が認められることを発見した。このことは、鹿鳴館時代に中国業者は衰退するという先行研究の見解を覆す結果となった。慶応3（1868）年に設置された神戸外国人居留地では、欧米業者が2から4社の間を年々行き来しており、なかには、横浜で開業した後に、神戸で開業した業者もあったが、横浜ほどの発展は認められなかったことを明らかにした。

第二に、横浜外国人居留地では、外国業者から日本人への洋服仕立て技術伝播について、欧米人や中国人に雇われる形で技術を習得した者と、欧米人を自らの店に雇う形で技術を習得した者とがあったことを明らかにした。

以上本研究で特筆すべき点は、長崎および横浜における洋服業の出現・形成の過程において、中国との連関を新たに発見した点である。洋服業者の中には、欧米から直接来日した欧米業者のほか、香港・上海より来日した欧米中の業者があったが、このことは、洋服業という西洋文化が中国を介して日本に持ち込まれたことを意味している。加えて、日本人の洋服仕立て技術の根源を追求した結果、欧米人より習った欧米直伝系と、中国人を介して習った中国経由系に別れることを発見した。

以上の成果は、日本における洋服業の源流を、欧米のみならず中国に見出すものであり、日本の服飾文化史だけでなく中国の服飾文化史の進展にも貢献することが出来ると考える。最終試験にも合格しており、審査員一同は、博士（学術）の学位論文として価値あるものと認める。